

審査の結果の要旨

氏名 金徳祐

美術館・博物館の建築計画学にはこれまで、利用者へのアンケート調査から満足度の高い展示形式や付属施設について論じる研究や、来館者の行動観察調査をもとに美術館疲れを把握しようとする研究など一定の蓄積があり、より利用者満足度の高い施設計画に寄与している。しかし、鑑賞そのものの質と環境との関係に迫る研究は多くはない。特に鑑賞の合間や鑑賞後の空間で一般来館者個人が置かれる状況が、その人の鑑賞体験の質にどのように関係するかについてはデータが殆どなく、検討されてこなかった。本論文「美術館における非展示空間の計画論的考察—印象的展示計画に向けて—」は、この未踏の課題に取り組む意欲的な論文である。本論文はこの課題に対して行動・心理・生理学的データを用いて分析を行い、鑑賞後の空間によって誘発される行動が、鑑賞したものの記憶に影響することを検証するとともに、より質の高い鑑賞体験をもたらすための環境デザイン上の配慮の可能性を考察した。

本論は5章よりなる。第1章では、まず一般個人が鑑賞を目的として来館した場合に利用する空間の中で、展示空間以外のものを非展示空間と定義し、非展示空間に関連する美術館・博物館の計画学研究を概観している。戦後から近年まで、購買、飲食、エントランスホールなどの非展示空間の設置が増加の一途を辿ってきたことが明らかになり、また展示鑑賞直後に飲食、購買の空間が位置するものも少なからずある現状が把握された。さらに美術館・博物館における連続的鑑賞を扱った研究を取り上げ、美術館疲れの問題と作品配置による記憶の残りやすさの問題とが指摘されていることを示し、それらが連続的鑑賞に集中したあとの注意回復と関係し、従って鑑賞直後の非展示空間での人間行動と関係することを問題提起した。以上を踏まえ、①鑑賞直後の非展示空間に想定される行動を実際に行い、鑑賞したものの記憶に影響を与えるかを検討する実験的考察。②連続鑑賞状態と非展示空間を間に入れた非連続な鑑賞の状態とでは、鑑賞する人の疲れが異なるかについて、実地での計測（フィールド実験）にもとづく考察。③非展示空間において想定された行動が実際に美術館・博物館で行われていることの検証と、空間構成による行動の違いの考察（フィールド調査）、という本論の構成を示し第2、3、4章で扱う仮説を示している。

第2章では、非展示空間において想定される「静かに座る」「ゆっくり歩く」「会話する」の3つの行動をとりあげ、同じ映像鑑賞をした後にこれらの行動をした場合、鑑賞した作品の背景の部分画像の記憶に違いがあるか実験的に検証した。その結果、鑑賞後に「静かに座る」「ゆっくり歩く」場合には「会話する」場合より鑑賞したものをよりよく記憶していることが統計的に明確になった。また、実験中の被験者の皮膚コンダクタンスレベルを計測した結果、会話中は他の2つの行動中に比べて有意に値が高く、被験者が情報のやりとりに集中してより覚醒があがり緊張した状態（インプット状態）にあったことが推察された。以上より、美術館・博物館における鑑賞の直後に「静かにすわる」「ゆっくり歩く」ようなある程度インプットの少ないリラクセスした行動を誘発する環境を用意すると、鑑賞したものが印象に残りやすい可能性が示唆された。

第3章では、展示密度が高い部屋を連結し典型的な団体展の展示をする美術館 S と、展示密度が低く個々の展示室の間に廊下がある美術館 T とで、鑑賞者の皮膚コンダクタンスレベルの推移が異なることをフィールド実験により明らかにした。美術館 S では鑑賞の初期に鑑賞者の覚醒が最高に達して、あとは徐々に下がる一方の疲労状態にあったのに対し、美術館 T では鑑賞者の覚醒は上下しながらゆっくり上昇し、最後の方で最高値に達する傾向が明らかになり、美術館疲労が非展示空間の挿入で緩和される状況が明示された。

第4章では、まず美術館 Y における7箇所ベンチで延べ147人の来館者の行動を仔細に観察し、インプット状態ではない「静かに座る」状態がベンチに座った延べ時間の2割強を占めること。また自然が見える窓のあるベンチで最も割合が高く、作品を遠方に臨むベンチで次に高いことが示された。次に美術館・博物館の展示エリア内の廊下4路とその他施設屋内の廊下2路での歩行速度を計測調査し、展示エリア内の廊下においては明確に「ゆっくり歩く」ことが検証された。以上のように来館者は実際に適切な場所で「静かに座る」や「ゆっくり歩く」を行っていた。しかし現状ではこうした場所は少ない。

第5章では以上をまとめた上で、今後の美術館計画に対して、作品の印象を深める視点から適度な非展示空間を挿入し、そこにベンチを設ける際には自然が見える窓や離れた位置の作品など視線の先に工夫を施すことなどを提言した。

審査では、各章の実証条件が異なり全体が断片的に読める点などの指摘が審査委員から提示され、全体を通しての論旨や条件について加筆する対応がなされた。最終的には、本論文は、鑑賞の合間や鑑賞後の空間で一般来館者個人が置かれる状況が、その人の作品鑑賞の質に関係することを、多角的で一定の信頼性を持つデータをもとに実証し、美術館・博物館計画に対して新たな視点を提供した点が高く評価されるとの見解で、審査員全員の一致をみた。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。